言葉

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学 公開日: 2013-05-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 根本, 美作子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/15819

読書の世界

言葉

根本 美作子
（ねもと・みさこ） 文学部助教授。
著書、『眠りと文学』中公新書。他、プルースト論、谷崎論、三島論など。

読書の大切さについて、小学校の時から散々聞かされてきたと思います。しかしなぜ読書が大切なのか、その点について明確な説明を与えられたことは少ないのではないでしょ

うか。私にも、どうして読書が大事なのか、簡潔に説明することはできないかもしれません。けれどもそこをあえて一言でまとめるとすれば、考える力の問題だと言えるような気がします。

読書といっても千差万別で、必ずしもいい読書ばかりとは限りません。しかしそれは、読む本の質に関係しているのでは決してなく、読み方の問題です。高尚な文学作品をたくさん読んだからといって、必ずしもいい読書体験をしているわけではないし、カントやハイデッガーを読むことがいい読書なのではない。逆に本に読まれてしまって、大した人生経験もしていないのに、すべてがわかったような気になってしまうという弊害が出てきたりします。そうした危険を承知の上で、それでもなお、なぜ読書が推奨されるのでしょうか。世の中一般の人がどういう理由から読書を勧めるのかはよくわかりません。けれども私個人にとって読書は、やはり何よりも抵抗力をつけるために必要不可欠な時間です。抵抗力とは、考える力です。

人は言葉を持った生き物です。言葉は、人が人と交わり、人を必要とすることの表れでもあるでしょう。つまり私が言葉をしゃべるということは、私自身が完全に自立した存在

であるわけではないことをすでに物語っているのです。私とは言葉に横断された存在です。だから放っておけば、私は私自身である前に、私という身体を借りて発言する言葉でしかなくなってしまいます。この言葉とは何よりもまず社会であるでしょう。自分の生きている社会を反映する言葉を人はまず喋るのです。それは必ずしも自分の選んだ言葉ではありません。日本人に生まれ落ちたがために日本語を習得する。それも、日本語の長い歴史の中の、ある特定の段階の日本語です。「ちょづいている」とか「こくる」という言葉を頻繁に使っているのも、私の個人的な意志からでは必ずしもない。自分と同世代の日本人がそう言っていて、他の世代と差をつけ、自分たちの仲間意識を強化するためにかなり意識的に流行言葉を取り入れる。けれどもこれは私個人の深い考えから出てきた言葉の選択ではないかもしれない。

言葉を社会から一方的に与えられつづけているかぎり、人は本当に自分であるとはいえないでしょう。個性などという言葉が最近日本でもやたらと宣伝されるようになりましたが、社会に宣伝されてしまったら、もう個性は個性でありえなくなります。真の個性は自分の言葉を持つ＝自分の言葉で考えるようになることから始まるのであり、社会の宣伝す

る個性を鵜呑みにしているようでは到底だめです。では自分の言葉を持つ＝自分の言葉で考えるとはどういうことなのでしょうか。

まず、言葉にはいろいろな言葉があるということを知るようにならなければなりません。育ってきた環境の中で自分に与えられた言葉が、その中の一つに過ぎないということを理解しなくてはならないのです。そこでいろいろな言葉の存在を教えてくれるのが本です。もちろん、本以外でも、自分とまったく異なる環境で育った人が喋るのを聞いて違和感を覚えるという体験をしたり、街頭の選挙演説を聞いて、自分の言葉との距離を感じたりなど、言葉の多様性を経験する機会は読書以外にもたくさんあるでしょう。

けれども書かれてある言葉を読むという行為には、普段の生活の中で出会う言葉にはない重みがあります。それは時間の重みです。単純に考えても、言葉を書くには相当の時間が必要です。そのようにして人が書いた言葉を読むのにも、またかなりの時間を要します。時計の針が無慈悲に進行していく中で、特定の時間を割いて、人は書き、読むのです。しかしそれだけではありません。文字はそもそも記録であり、伝統としての歴史です。写真や映画、果てはデジタルカメラやビデオといったテクノロジーが出現するまでは、人は線

と文字によってしか物事を記録することができませんでした。文字を書くということは何かを残すことです。買い物のメモがもっとも身近な例でしょう。

文字の世界に入るということはつまり、あらゆる世界のあらゆる時代の言葉への鍵を握ることなのです。読書を通じて文字に親しむことによって、私は自分に与えられた言葉が、数多くある言葉の可能性の中の限られた一つの言葉でしかないことに徐々に気づいていくと同時に、いかにそれが自分の育ってきた偏狭な環境によって「与えられた」言葉に過ぎないかを発見していくでしょう。そして様々な言葉に触れていく中で、自分の言葉を少しずつ選ぶことができるようになっていくでしょう。それでももちろん、言葉が言葉であるかぎり、つまり言葉が自分にだけしか通じない暗号ではなく、他者に通じるための手段であるかぎり、言葉は完全に自分のものになることはないでしょう。それは、他者と共有する言葉を喋る自分が、決して完全な自分になりえないのと同じことです。

読書を通じて自分の言葉を探すということはおそらく、終わりのない自分探しをするということでもあり、決して終わることのない冒険への旅立ちを意味しているのです。